



集団遊びの発展の条件と指導について

— 集団機能および役割の分化を中心として —

神 沢 良 輔

一 遊びの教育的価値と実践上の問題点

幼児の教育のなかで、遊びに費される時間は非常に多い。このことは、教育的実践のなかで、教師が、遊びに非常に多くの教育的価値を認めていることによるためであろう。しかし、そのような教育的価値を具体的に示せといわれると、なんとなくはつきりせず、非常に困難を感じるのではなからうか。

過去においても、遊びについては、いろいろな方面から研究がなされている。その中の一例として、ソープ(註1)が、遊びの価値についてののべていることを以下に示そう。

「遊びが、子どもの発達にとって本質的なものであると主張するのに好都合のように集められることのできる、かなりたくさんの証拠がある。こどもは、遊びの価値については何も知らないし、その結果を質問することもしない。こどもにとって、遊びは楽しい経験

であり、自由に、そして不当な抑制をされることなく、自分自身を表明する機会である。自発的な遊びの利益 (Benefit) は、こども自身の生活体を変化させる力の源泉の要求、ならびに、自分の環境の要求に対しての適応を、自分で大いに準備することである。ある人(註2)は、こどもにとって、遊びは生活それ自体であり、まじめなものであり、こどもからすべてをうばうものであり、自己確認をすることである。遊びによって、こどもは生活し成長する。遊びを通して、こどもは、自己のパーソナリティを発達させ、そして、社会においてうまくやっていく能力を発達させる、といっている。"とのべており、さらに遊びについての、重要な利益を、便宜上、五つの側面に分けうるといっている。

即ち、(1) 身体的な面、(2) 教育的な面、(3) 社会的な面、(4) これらがパーソナリティをつくることに関係している面、(5) 治療的な面、である。いま、これらの内容について紹介するのは、紙

数が許さないので省略するが、この五つの面は、幼児教育においては、いずれも重要な面であり、これらは、そのまま遊びの教育的価値についての、五つの側面ということができよう。この場合には、(2)の教育的な面は、知的な面といった方がよいであろう。

さて、これらのことから、遊びが幼児教育において占める位置の重大さや、その本質、価値の側面については一応の理解ができる。そして、わたくしたちも、上述のようなことを考えながら、毎日の実践をしていることは間違いない。

では、遊びの教育的価値を理解してさえいけば、こどもの遊びの指導ができるかといえば、いうまでもなく、できないといわなくてはならないだろう。けれども、遊びの教育的価値を理解せずに、指導することはできないであろう。

これまで、遊びの教育的価値について、いろいろのべてきたが、これは、わたくしたちが、教育的な実践をしようとしたり、評価をしようとする場合に、いつも第一に問題になることだからである。

それは、遊びそのものが、きわめて多面的な活動であり、活動そのものがきわめて機能的であり、瞬間的な要因に作用され、また、幼児の生活そのものであるというようなことによるためであろう。

だから、遊びを教育的な実践のなかでとりあげるためには、幼児の遊びの本質や、価値を、文献的に理解すると同時に、実際の幼児の遊びの場において、遊びの発展を変化させていく条件や過程を明らかにしていく、その中で、さらに、遊びの本質や価値を、一層具体的に理解していくことがもっと必要なことであろう。

また、遊びが、幼児のもっとも基本的な、そして本質的な行動の一つであるとする、いうまでもなく、幼児は、遊びの発展とその変容の過程を通じて、もっとも大切な学習や経験をしていくであろう。それは、幼児の世界が、具体的であり、実体的なものである。(註3)からでもある。

二 遊びとその発展の条件

さて、つぎに、このような幼児教育の中心になっている遊びについて、それが発展していくための条件を考えてみよう。

前述のように、遊びが幼児の基本的な行動であるとなると、遊びを進展させていく条件としては、一般的に、個体的条件と、環境的条件に大きく分けて考えてみてよいであろう。そして、この二つの条件のからみ合わせで、幼児の遊びの発展が考えられる。

まず、個体的条件についてみてみよう。この中では、自己活動・自発的活動などということが、とくに幼児教育にとっては大切だと考えられている。これは、幼児が、自分の環境の中の刺激に対して、活動的に、探求的に、好奇的に、たくみな創造性をもって、積極的に方向づけられている。(註4)ということによってである。そして、幼児は、自発的活動によって、望ましい経験を「自己教育」(註5)として学習していくことができるのである。また、「生活体のなかにある自発的自律的な活動傾向は、動機」(註6)という名前ではよばれている。

さて、他の個体的条件については、紙面が許さないので項目のみ

を以下に列挙しよう。すなわち、(1) 動機づけ、(2) 興味、(3) 誘
意性、(4) 能力、(5) 構え、(6) 性格、(7) 身体的条件、(8) 情緒
的條件、(9) レディネス などであろう。

つぎに環境的條件については、教師や友人との関係を中心とする
人間的環境と、施設・設備・材料などを中心とする物的環境に大き
く分けられよう。このなかで、教師は、指導の水準にあった内容
を準備したり、遊んでいられることもを処理したり、雰囲気創造し、
それを持続するようにしたり”(註7)する。そして、幼児にとつて
は、もつとも大切な環境であることはいうまでもないし、また、も
つともよく影響を受ける環境でもある。そして、教師の言語や動作
は、幼児集団や、遊びの発展に大きな影響を与えているであろう。

他の條件については、説明を省略するが、環境的條件が整備さ
れ、それが望ましいものになればなるほど、遊びが発展し、望まし
い学習がなされることはいうまでもないであろう。

しかし、実際の遊びの場で、これらの條件を理解しながら指導す
ることは、非常に困難であろう。それは、前述のように、遊びのな
かには、あまりにも多くの條件が内在しているからである。

それ故に、指導としては、遊びのなかでの幼児の活動から、その
教育的価値からみて、もつとも価値のあると思われるものを中心
にして、その活動をもたらしした條件を分析し、理解して指導してい
かなくてはならないだろう。このようにいっても、実際には、遊びが
多面的な活動であり、機能的なものであるので、そのなかに、多
くの教育的価値が含まれるのは当然である。

ここでは、その一つとして、集団機能と役割の分化ということ
を中心としてとりあげることにする。

なお、これまでのべてきたことは、集団機能と役割の分化を中心
とする指導をするために、どうしても、そのうらづけと、考え方や
理解のための基本となる共通のものが必要であったからであつて、
すこしくどいようであつたが、あえて説明した次第である。

三 集団の機能と役割の分化

教師が、二、三本のなわを運動場の片すみにおいておく。それを
みつけた五、六人の子どもたちが、つなひきなどをしていたが、や
がて、なわの両端をくくって、なわ電車をつくつた。二人一組で、
ひとりには運転手、ひとりには車掌になつて運動場をまわりはじめる。
お客のいない電車であるが満足して走っている。すると、他の遊び
をしていた数人の子どもたちが、“のせてくれー”とやってくる。
お客ができた。

この遊びは、子どもたちにとって興味があるとみえて、昨日にひ
きつづき、今日も朝早くからしている。そのうちに駅長ができた。
そのために、切符やお金が必要となつた。また、切符きり、切符う
りもできて、遊びが次第に複雑になつてきた。

これは、一般にみられる、“ごっこ遊び”の発展の過程であらう
が、このような過程において、教育としての遊びの大切な価値が認
められるし、その方向づけとしての指導ということが考えられよう。
すなわち、最初は、“なわ”という物的環境による刺激が一つの条

件となって、一部の幼児が他の集団からわかれて、電車ごっこ^(註)をはじめ、そこに乗務員という役割ができた。乗務員という役割は、さらに車掌と運転手という二つの役割にわかれ、そのうちに他の集団から、乗客という役割が、なんらかの条件によって分化してくる。

運転手は、はじめはでたために走っていたが、駅長という役割が分化してくるようになると、その指示に従わなければならないし、線路ができれば、その上より走るとは許されない。そして、行き先も、途中の停車駅も、それらの事態におけることもたちのとりきめによって決定されるようになり、運転手の役割の内容も、遊びの内容も分化してくる。

このように、遊びが発展し、役割がいろいろな事態における要求や幼児たちの自発性や動機によって分化するのにもなつて、こどもたち自身の、自分でしなければならぬ役割の内容が深まってきた、それに対する責任や義務を遂行することが要求され、ルールが発生してくるようになり、人間関係も複雑になってくる。そして、他の役割との関係も密接になり、協力関係の必要に迫られる。また、このようにならなければ、遊びの発展は望めないであろう。そして遊びの発展は、前述のようなことを、個々の幼児に要求し、幼児は、このような要求に適応できるように、みんなで遊びを發展させていく。また、役割が分化してくると、具体的な多くの教育的価値が、しだいにはっきりと認められてくる。

それ故に、教師に対しては、このような幼児の遊びの過程における、具体的な教育的価値について理解することが要求される。ま

た、教師は、幼児にとって、どのような望ましい行動や経験が、その過程で実際になされ、どのように發達していくかを理解しなければならぬ。そして、どのように対処するのをもっともよいか、という質問に正しく答えることが要求される。

また、教師は、そのために必要な環境的条件を、こどもの遊びの發達にともなつて、よりよい状態を整備することができなければならないし、それぞれの役割をはたしているこどもたちを、方向づけていくことが要求される。ここで、どのように指導するかという問題が具体的になつてくる。

そのためには、前述のように、こどもの遊びの發展をよく観察して理解すると同時に、その条件を分析することが、どうしても必要となる。エリコニン(註⁸)も、役割遊びでの内容は、重要な教育的意義をもっている。それゆえ、われわれは、こどもがなにをしてあそんでいるかを、細かく見守ることが必要である^(註⁹)とのべている。では、実際に、どのようにすれば、もっともよいかという実践上の大きな問題が提出される。

これについては、その一例として、四日市の幼稚園においてなされた、実際の研究例を中心にしてみていくことにしよう。

四 四日市の幼稚園における研究

前述のような、集団の機能と役割の分化について、四日市の幼稚園では、実践を中心として、一年間にわたり、数園で共同研究(註¹⁰)をした。

第一表

日案の記録形式・記録項目・記録内容の記入事項

時間	形態	領域	目標	誘導のメモ	幼児の活動	集団の分化	役割の分化	指導のメモ	個人の指導	反省・評価	備考
8,30 9,00 時刻・時間を記入	保育の形態を記入	活動内容の領域について記入	前日の活動の振り返り の動を思本を 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目	児ら要れの日 の動か必わ日 日活えと、標 の考だる、目

明日の指導の要点 本日の幼児の活動からみて考えられる、明日の指導の要点を記入
(なお、環境の条件の整備については、翌日の日案の誘導のメモに記入)

以下、それについて紹介しつつ、実践上の問題点をひろってみよう。

研究の方法は、実践場面における教師の活動を含めた、幼児の活動についての自由観察法的方法によっている。

観察記録は、日案のような形式をつくり、それに記録をすることにし、前述の条件が記録しやすいような項目を設定した。日案のような形式にしたのは、教師の活動をも含めた教育の場においての観察がもっとも大切であると考えたことと、それを教師が記

録していかねばならないということのためである。そのために、統制場面での観察によく使用されるような、詳細な項目による観察は不可能であるので、そのような項目は、残念ではあるが省略することにした。

現在使用している記録形式、記録項目、記録内容の記入事項を示すと、第一表のようである。なお、この形式は、研究方法の進歩と、教師の観察能力や指導方法の向上、遊びの本質や遊びの教育的価値の把握のしかたの変化などにもなつて、何度でも修正されなければならぬし、修正することによって、実践の内容も向上していくであろう。

第二表 役割別の活動分析表の記録形式・記録項目・記録内容の記入事項

ここに役割名を記入	自発活動	誘導	幼児の活動
集った人員 (N) 男 (M) 女 (F) 場面 (S) 遊びに使った材料 (M) 役割の内容 (Ro) ルール (Ru) 遊びの持続時間 (T) 日時 (D)	・幼児の内的に動機づけられた行動 ・または環境による外的に動機づけられた行動と ・その遊びの発展との関係について記入	・幼児の行動に影響を与えたとと思われる教師の身体的・言語的行動 ・遊びの発展を予想して準備または配置した環境と幼児の行動との関係 ・教師の意図した指導と幼児の行動との関係について記入	・幼児の実際の活動の概略 ・および行動の変容の過程を ・個体的条件や環境的条件との関係で記入する

う。

この日案に記録される事項のうち、遊びを中心とした、役割の分化については、各役割ごとに、第二表に示すような分析表に再記入される。この表からは、実践にどう必要か、集団機能や役割の分化に関係する以下のような具体的な問題が考えられる。そして、そのような問題に答えられるように考えながら記録する必要がある。

また、以下にのべる項目は、これまでの実践によって問題にされたものを含んでいる。

(1) ある一つの役割には、どの程度のことどもたちが参加したか。一つの役割に参加できることどもたちは何人ぐらいか。遊びの発展にもなつて、どのように変化するか。その役割に参加したことどもたちの性別や、学級内での社会的地位はどうか。

(2) ことどもたちは、どのような場面を構成したか。または、どのような場面の構成の中で遊んでいるのか。そして、どのような場所を選んで遊んでいるのか。それは、遊びの発展に対してどのように変化していくか。

(3) どのような材料を遊びのために使用しているのか。そして、それをどのように構成しているか。遊びの発展に対して、遊び方や構成がどのように変化していくか。

(4) 役割の内容はどんなものか。そして、それは遊びの発展にもなつて、どのように深まり、機能化していくか。それに対することどもたちの適応はどうか。役割の内容の深まりに対して、ことどもたちの間で、どのような話し合いがなされ、どのように実行されたか。

(5) 遊びのなかで、どのようなルールがあらわれ、どのように使用されているか。そのルールは、自然発生的であったか——インフォーマル・ルールといった方がよいかも知れない——それとも言語によってきめられたか。そのルールをつくったのはだれか。またそれをつくったことどもたちの学級内の社会的地位はどうか。そして、それは質的にも量的にもどのように変化していくか。

(6) 遊びの持続時間はどの程度であったか。遊びの発展やその他の条件によって、持続時間はどのように変化するか。

(7) 役割は、どのような契機や動機や刺激によって分化していったのか。

(8) 役割に対する、幼児の内的または外的動機づけは、どのようなものであったか。

(9) 幼児の行動に影響を与えたとされる教師の刺激は、どのようなものであったか。

それに対する幼児の反応はどのようにあらわれたか。

(10) 教師の準備した物的環境は、幼児の行動にどのような影響を与えたか。それに対する幼児の反応はどのようなものであったか。また、遊びの発展には、どのようなかたちになってあらわれてきたか。

(11) 教師はどのような事態で、指導の機会をみつけようとしたか。また、どのように指導をしたか。それによって幼児の行動は、どのように変容したか。

(12) 幼児の遊んでいる場の雰囲気や友人関係——リーダー・フォローの関係などを含んで——や社会的交渉は、どのようなであったか。

か。

大体、以上のようなことが、第二表から問題として考えられる。

そして、第二表は、ある一日の、ある一つの役割についてののみみたのであるので、他の同じように分析した役割の表との関連が考えられると思われる。他の表との関係を比較して考えないと、こどもの全体の行動はわからなくなり、集団機能や役割の分化の本質的な問題を見失うことになるであろう。それには

(1) 役割間の協力関係や相互交渉はどうなっていたか。
(2) 他の役割の内容に対して、幼児はどのような認識をもって行動していたと思われるか。

(3) 他の役割のルールに対しては、どのような行動で反応したり、適応したりしていたか。

(4) 役割間の人員の移動は、どのようになっているか。それは、遊びの発展にもなって、どのように変化していったか。

(5) 遊びの全体的な発展に対して、それぞれの役割は、どのような相互関係をもって反応をしていったか。

(6) それぞれの役割を含んだ、全体の雰囲気はどうであったか。なごのことが、実践上の問題として、とりあげられる。

また、ある一つの役割の発展を、そして、全体の役割の発展を日を追ってみていくことも、同様に必要な問題である。

以上のべたことが理解されれば、自然に指導の方法もでてくるのではないだろうか。

ここで、参考までに、ある一定期間の、一つの遊びの発展におけ

る役割の分化の実例を、役割の名称のみを中心に整理した結果を示すと、第三表のようになる。

なお、第三表に示した例では、第二表の役割別の分析表は、全部で六十六枚必要となる。

五 指導の方法

幼児の指導には、「全体としてのこども」(註10)の理解が必要である。それは、幼児が未分化であるということのためかも知れないが、前述の第二表から提示された問題は、全体としてのこどもの見方をしなければならぬ一例でもあろう。

だから、指導の第一歩は、これらの問題をよく理解し、観察することのできる教師の能力である。そして、それと同時に、これらの問題から提示されたことを、明日の指導のなかで、どのように生かし、どのように解決するかということである。そのためには、どのような点に努力をし、どのようなものを準備すべきかを考えて用意することであろう。

用意されたものは、明日の指導のなかで、幼児の活動の状態をみながら、無理のないように、できるだけ生かすように努力し、実践してみる必要がある。そして、それについても、やはり、前述のような方法で記録し、それをもとにして、反省・評価し、さらに、つぎの日のために用意することをはっきりさせることが大切であろう。

このような繰り返しは、単なる繰り返しではなく、発展でなくては

